

受領No. 1648

ラオスと日本の養蜂文化の比較：ミツバチの誘引植物と人工誘引剤に着目して

代表研究者 続木 梨愛（京都大学人間・環境学研究科 博士課程 1 年）

Comparing Beekeeping Cultures in Laos and Japan: A Study of Bee-Attracting Plants and Artificial Attractants

Representative Ria Tsuzuki (PhD student, 1st grade, Faculty of Human and Environmental Studies, Kyoto University)

研究概要

本研究の目的は、養蜂実践におけるミツバチの誘引物質に注目し、科学技術がどのように受容され、実践に組み込まれているのかを明らかにすることである。研究対象はラオスであり、特に日本の NPO による養蜂技術支援が行われている点が特徴である。この支援において、ミツバチの誘引物質が重要な役割を果たしており、伝統的な養蜂技術と新たな科学技術の接点として注目されている。本研究では、ラオスでの養蜂実践における誘引物質の使用を文化人類学的視点から調査する。具体的には、文献調査を通じてラオスの養蜂に関する情報を収集し、さらに現地調査では 60 日間にわたり参与観察とインタビューを実施する。この調査を通じて、ミツバチの誘引物質がどのように受け入れられ、養蜂家たちの実践にどう影響を与えているのかを探求する。本研究達成時には、文化人類学における人間と動物の関係についての研究にミツバチという対象および科学技術の使用という二つの視点から新たな理論を導き出すとともに、人間と動物という枠組みを超えて「科学技術と生き物がいかに共生可能か」という問いに答える。